

まれており、東海地方の研究にとって座右の宝となるであろう。

最後に、これは私の持論なのであるが、本書が、いつでも希望者が入手できるように、とくに市当局の配慮をのぞみたい。これだけの苦心をはらわれた本書が、一回の出版をもって版を断つとすればあまりに惜しい。本書のため示された市当局の理解を並々ならぬものがあると推測し敬服するのであるが、今後、いつでも入手し得るとすれば、さらに大きな便益を学界にも与えてくれることとなるのであり、関係者各位の御高配を切望するものである。

(A5判本文二、一〇一頁図版五葉 昭和四五年三月 一宮市刊) (熱田 公)

茨城県史編さん中世史部会編

茨城県史料 中世編 I

本書は茨城県史料の第六回配本として、宝月圭吾氏を代表とする県史編さん中世史部会(宮田俊彦、菊地勇次郎、佐々木銀弥、網野善彦、新田英治氏ら)によって編纂さ

れたものである。本書には鹿島・行方・新治・稲敷・北相馬の県南五郡所在の文書が収められており、残余は第二巻に、また県外所在文書は別に県外編に収録される由である。収載するところ一一四〇通、巻頭には約七十頁に及ぶ解説が付せられている。解説の詳細、懇切なことは、本史料集の特色ともいうべく、「中世文書概観」からはじめて、諸郡、諸社寺の歴史、文書の解題に及び、それ自体学術論文として優れた価値をもっている。紙数の都合上、その内容をお伝えする余裕はないが、以下の紹介も多くはこの解説に拠っていることをお断りしておきたい。

収載文書中の庄巻は鹿島神宮関係文書であり、「鹿島神宮文書」(鹿島神宮文書、大宮司家文書、大禰宜家文書)をはじめ、「鹿島則孝文書」、「塙不二丸氏所藏文書」、合計六四九通に及び、全巻の過半を占めている。夙に小宮山昌秀の「楓軒文書纂」、後には宮地直一氏の「鹿島神宮文書第一輯」によって知られていたものも少なくないが、前者は公刊されておらず、後者も入手し

たく、且つ文書の複雑な伝存状況の故もあって、利用の便を欠いていた。鹿島神宮が藤原氏の氏神であるところから、多数の公家関係文書を蔵し、また武神として崇敬された結果、多数の武家関係文書を蔵し、香取神宮関係文書とならんで、関東神社関係文書の双璧であるのみならず、さらに日本中世史研究において占める位置の重要性については、更めて申すまでもない。かつてこの地に旅行した折、刊行の近い事を聞かされ楽しみにしていただけに、とりわけ喜ばしく思われる。いま諸本伝存状況の綿密な考証を基礎として、内閣文庫・静嘉堂文庫等の蔵本と比較校訂し、鹿島神宮関係文書の決定版が完成された点に、本史料集の最大の学術的価値が認められる。

質量ともにすぐれた個人所藏文書を多く収めているのも、本書の特色であろう。「芹沢文書」には室町時代の古河公方との関係を示す文書、医薬関係文書が多く、「鳥名木文書」は、鎌倉後期、南北朝の謠状から中世士豪の生活を知ることができ、室町期地方政治の好史料である。「税所文書」は、

国衙の税所の職を世襲し、常陸大掾家と姻戚関係をもつ税所氏の文書であり、とくに弘安二年（一二七九）の作田惣勘文は「常陸国太田文」（統群書類従）の原本で、常陸国衙によって作成されたものと見られ、大田文の作成、常陸の郡荘域の確定、中世村落史の好史料である。鎌倉時代、信濃の豪族であった臼田氏が、南北朝時代、常陸稲敷郡に居を移し、近世初期に百姓となる迄の波瀾に富む歴史は、「臼田文書」に伝えられている。寺院関係では、「円密院文書」があり、南北朝期以来の関東における天台宗檀那流、恵心流の教線拡大の状況、信太荘の実態を示す貴重な史料である。

その他、公武の徳政に関する重要史料を含む「常陸国総社宮文書」をはじめ、「日輪寺文書」「法雲寺文書」等についてもふれて見たいが、すでに紙数も尽きてしまった。

常陸における文書集の編纂は、江戸時代以来盛んに行なわれてきたが、現在それらは一般に写本の形で存在している。今回それが公刊され、利用し易くなったばかりか、

調査によって発見された原本によって刊行された部分の少なくないことは、本書が今日の古文書研究の最高水準に立つ文書集であることを示している。

吉田神社、薬王院等の古文書を含むと考えられる第二巻以下の続刊が、大いに鶴首されるところである。

（B5版五〇三頁 昭和四五年三月 茨城県刊 頒価三、〇〇〇円 なお申込先は水戸市三の九二丁目 県立図書館内茨城県史編さん室）（上横手雅敬）

コーンフォード著
大沼忠弘訳
左近司祥子

トゥーキーニーデイス

—— 神話の歴史家 ——

原著は一九〇七年に刊行され、「E.ハリスン女史に献呈されている。本書の意図するところは、懐疑的批判的精神が旺盛だとするトゥーキーニーデイスに対する在来の通説的な解釈に反論することである。そのため本訳書末尾の訳者解題にもある通

り、刊行当初より学界から好意をもってはむかえられず、近年に至るもなお、本書を反駁する議論があつたと断たない。しかし、裏を返せば、それは本書の存在価値が今なお失なわれていないことを示しており、一九六五年に原著が覆刻され、今また邦訳が出たこともそれを示すものであらう。

序文によると、著者の目的はトゥーキーニーデイスの「歴史」の「真骨頂」というべき芸術的局面を明らかにすることにある。内容は、第一部「歴史家トゥーキーニーデイス」と第二部「神話家トゥーキーニーデイス」とに分かれているが、もちろん、一貫した主題を追及したものである。

第一部はペロポネソス戦争原因考ともいうべきもので、著者コーンフォードはトゥーキーニーデイスのあげている説明には満足せず、みずから原因についての仮説を立てている。すなわち以下のようなものである。戦争を意図したのは、ペリクレースの支持層の中核をなすペライエウスの新興工商業者であつて、彼らの強い要求をペリクレースはうけいれざるを得なかったの